

お知らせページ

介護の質研究会

テーマ：「その人らしく - 自立支援法について -」
日時：4月8日（金）19:00～
会場：東京文化会館4階（JR上野駅前）
申し込み：鈴木・朴（03-3879-7823）
参加費：無料

認知症ワーキング

テーマ：ためしてガッテン「認知症早期発見」
日時：4月10日（日）13:30～
会場：東京ボランティアセンター（JR飯田橋駅横）
申し込み：ファックスにて3787-3117
参加費：資料のコピー代として100円位

閣議決定された「介護保険法案」を学ぶ

日時：4月26日（火）19:00～
会場：大塚労働会館5階 地評会議室
参加費：無料
連絡先：5395-3171（久保宛）
※ 先着50名限定の企画です。

ヘルパーが伝える日々 ～介護保険改正（2013年）を見据えて～

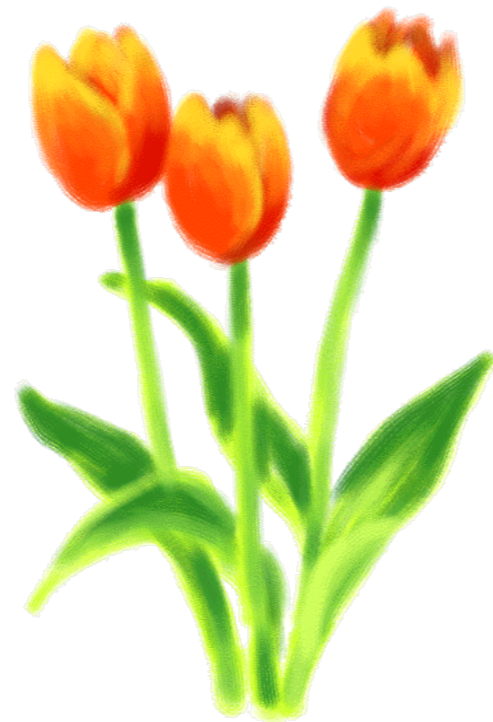
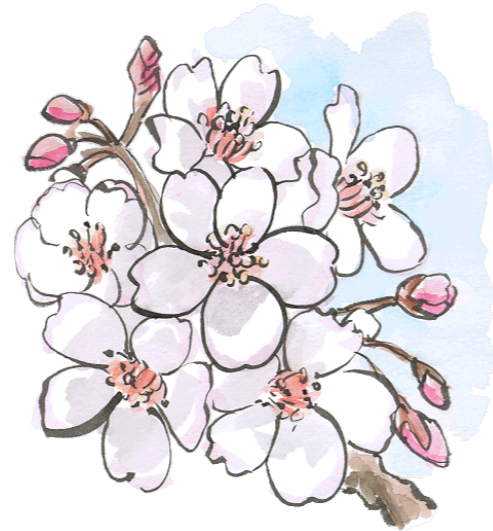
日時：5月12日（木）13:30～
会場：品川中小企業センター（東急大井町線 下神明駅）
参加費：無料
連絡先：03-3787-7430（宮本宛）

東京介護フォーラム

日時：5月28日（土）13:00～
会場：大塚ラパスホール7階
主催：東京の介護を良くする会
参加費：無料

共に介護を学びあい励まし合いネットワーク

〒142-0063 東京都品川区荏原1-24-23 角田アパート1F Tel・Fax：03-3787-3117
PCアドレス：ruka@ga2.so-net.ne.jp 編集責任者：藤原るか



次回18号は5月18日発行予定です。

CLA だより 第17号 11/4/6

発行：共に介護を学びあい・励まし合いネットワーク



「CLA（クラ）」はラテン語で憂い、辛さ、気遣い、共感などと云った意味で、英語のキューアーやケアの語源です。



東日本大震災死者・不明者数：2万7368人（2011年4月2日現在）

地震・津波・原発被害にあわれたすべてのみなさんと、これからの暮らしを生き、考え、発信・行動してゆきたいと思っています。

共に介護を学びあい・励まし合いネットワーク一同

どうなっていくのか？ 「生活援助」「医療行為」「軽度者」等々 介護保険 10年とこれか 森 恵美 (介護福祉士)

3月25日、上記のタイトルで開催された学習会は、お互いの自己紹介でスタートしました。3月11日の地震時にはどうしていたかについて報告があった後、篠崎先生（八戸大学）による八戸の被災の様子と医療行為についての現状とこれからについて話をいただきました。



道端の風景



川原での風景

学生12名で参加した岩手県・宮古市のボランティア活動の状況は県社協の要請で向かったにも関わらず、現地の施設では人数は足りており行政と情報と現場での温度差を感じたとのこと。実際にお手伝いに入るのは食事介助とコミュニケーション。そして、ペットボトルや缶の洗浄。生活相談員は別行動で、物資のオムツの整理や来訪者の対応。

先生は、これだけの情報量がありながら実際に必要な情報が正しく伝わっていないのではないか？また、テレビでは「物資が足りていない。」と言われているが、実際は必要などころには届いていないのではないか？非常時に於いても、行政と現場の意見、見解、情報、視点の違いを感じたとの事。そして、ボランティアは、緊急の場合、専門性を求められる事はないという事だ。実際に現地入りした話を聞いて、「私が施設に勤めている立場で考えると、ボランティアとして来てくださった人に利用者をすぐにはお願い出来ないだろうと考える」と発言すると様々な意見をいただきました。

今回の地震で、働いていた職場の災害マニュアルは、ライフラインが通じているのが前提で作成されており、見直しの検討があると感じました。また、都内でも精神的ダメージを受けているお年寄りもおられると聞きました。

今、私たちが出来ることは自分たちが介護職としての立場で何が出来るか考えていく事、互いに話し合っていく事が大事だと思いました。

現状の今、起きている問題や課題を知る良い機会だったと思います。また、2次会での話もとても勉強になる話でした。交流を持って本当に良かったです。ありがとうございました。



施設内にあるコンビニ

月額 54 万円が保障されるオランダの介護保険

介護保険のシステムについて伺った際、ランクは10段階に分かれており、レベル1（最軽度）で毎日€28 × 365日 = (日本円換算 120円 @ 3360) レベル10（最重度）で毎日€150 × 365日 = (同上 @ 18000円) の予算措置があり、認知症に対してはレベル5～レベ

ル8の判定がされるとのことでした。判定基準などのアセスメントシートは後日メールして頂くことになっています。

「日本では認知症ケアが重要だと認識が最近出てきているが、オランダでは？」の問いに「何故、認知症だけが取り分けて出てくるのですか？他の病気もありますし、長生きしますと自然なことでしょう」と説明されていました。

家事サービスは同居でもOKだそうです。「本人への必要なサービスとして考えます」と言われていました。

レベル1・2・3と資格を上げてゆく際に見ているポイントを伺うと「全体を見られるかどうかで、判断しています。ヘルパーは視野が広くないといけない」と応えられていました。

イギリスでもオランダでもケアの現場環境は衝撃的に差がありすぎて……毎度ですが日本の在宅を支える8割近いヘルパーにまず、最低基準の労働基準法を守った対応をする事でケアの質が保証される事について、仲間・地域から合意を広げ国民的支持につなげる「発信と実践」を続けていきたいと思いました。



オランダでの交流の一幕

オランダのオレンジカラーでサッカーの決勝戦を応援しました。



オランダ・デルフトの街

ルパーを、オランダから見ると「不思議」と思われているかもしれません。

訪問は1時間や1時間30分が多いが、10分という単位もあり、点眼や見守り（安否確認）が主な仕事。「普通は必要がないけれど」と前置きがあり、血圧測定等する場合もあるとのこと。精神的なケアは認められており、できるだけ自宅で過ごせる様にサポートしています。移動時間は自転車で15分位です。ケアの時間が不足している場合は、コーディネーターに足りない点を伝えるとすぐに調整してくれています。「家族へのレスパイトについても保障されている」と見せて頂いたショートの一部「屋はワインもセットされ、ホテル並みでした！



ホテルのようなショートの居室

5月12日や11月10日は「介護の日」で「パートナーや近所の人のお世話をしてくれる人たちの為の日」とプレゼントをもらったりしているそうです。

1日の訪問は7人～10人位で午前中に介護の必要な人が集中するそうです。「午後は薬を渡したりと介護の必要な人が少ない」とサマンサさんから説明してもらいました。

前日の懇談の時は控えめだったサマンサさんは、私達を見つけるとすぐにEPAという端末機を見せてくれ、「私達の一日はここに記録されてゆく」と自慢げに教えてくれました。機械化がかなり進んでおり、効率的に仕事をされていると思いました。

懇談の中で「日本では、政府のシステムが家族介護



EPAを見せるサマンサさん

に頼る中で介護殺人がケアの中で起こるがオランダでは？」との質問に、3人とも驚きの表情となり、「オランダでは介護殺人はありません」とすぐに真剣に答えられ「それはなんとかしなければ」とおっしゃいました。さらに施設の待機時間などを伺うと、「施設のエリア等にこだわらなければ、半年位の待機はある」とのことですが、「何年も待たされたり、入れないことはない」とのこと。

入居施設見学では、ご夫婦で10年住まわれている方のお宅にも伺うことができ、ゆったりして機能的な間取りと満足げなお二人の話を伺うことができました。

また、見学の際、温水プールや食堂とカフェにレストラン、売店に美容室等、普通に生活できる空間と、地域の方も参加し楽しめるような作りとなっていること、単身での入居者の方の部屋と家族での入居者の方の2つの部屋とホテル並のショートは北欧での設備と遜色がありませんでした。



温水プール（施設内）



明るい食堂

会計報告

収入		支出	
	9,000円	パワーポイント	3,000円
		会場費	1,700円
		資料印刷費	1,440円
		運送料	2,980円

<現段階 被災地への物資及びカンパの報告>

四国 文旦→支援金（1万500円）
東京 リハパン5袋
歯ブラシ20本 髭剃り10本 ヘアーバンドナ5本
コーヒー1瓶 ビニール袋 広島 リハパン1袋、
ティッシュ・トイレトペーパー等

21世紀老福連のリレー便に合流して、新潟→宮城県へ届けられました。

引き続き現地との連携で、物資や人を送って行きたいと思います。物資については物流が再開し始めていますので、中断します。ご協力ありがとうございました。

ボランティアとして現地に入りたい方はご連絡下さい。

事務局としては4月15日～17日の間で被災地のホームヘルプについての実態把握で宮城から北上して岩手に向かう予定です。希望者は事務局宛にご連絡下さい。

- ・3月11日に閣議決定された内容と当日アピールを出そうという「医療行為」につきましては次号に掲載します。
- ・篠崎先生より「ビデオレター」の送信以来が入っています。仲間・職場等で取り組んでいきませんか？できるところから白いボードに応援メッセージを書いてそれぞれ映しあってみましょう。送信先は事務局へ。

被災地で感じる 介護職という大きな支え 篠崎良勝（八戸大学人間健康学部准教授）

被災地に住む私が、個人的に感じたことを寄稿させていただきます。

青森県内で津波による被害があったのは、主に階上町・八戸市・おいらせ町・三沢市です。被害が甚大な福島県・宮城県・岩手県沿岸を北上した延長線上にあります。青森県は南の3県と比較すれば、被害範囲は少なかったでしょう。しかし、津波により自宅が倒壊したり、床上浸水の被害を多くの方が受け、避難所生活を強いられているという点では被害は同じ状況です。また、自宅はあってもお米がない、トイレトペーパーがない、足が不自由で買い物にも行けない、ガソリンがないためにボランティアにいけない、という状況もあります。さらに、避

難所の生活が長くなってくると、「食事は毎食おにぎりばかりで食欲も湧かなくなってきた。ちゃんとした食事がしたい」という声も避難者からは漏れ聞こえてきます。このような状況下で感じること、それは「制限のある中で生き続けることのストレス」です。そして、この「制限のある中で生き続けることのストレス」に風穴を開け、風通しが良くなる役割として、生活を支えるスペシャリストの必要性を切に感じています。つまり、介護職の必要性です。

私は震災から5日後、八戸市内でガソリンの給油をするため、今朝は朝3時からガソリンスタンドに並びまし

た。車がなければ何もできない生活圏がここ東北地方には多くあります。この時点で既に 50 台以上が並んでいました。数量制限でようやく 10 リットルのガソリン入れ、スーパーに行くとお米はなく、24 時間 365 日営業のコンビニも無期限休業があちこちで見受けられました。

このような状況でも地域ではボランティアの方が炊き出し、津波で被害を受けた家屋の補修などに参加しています。しかし、移動手段である車の燃料が枯渇すると行きたくても行けない人が出てきている現状もあります。

介護の現場でも状況は同じです。デイサービスは送迎車の燃料不足で閉鎖されています。訪問介護もヘルパーさんが訪問はおろか、通勤すらできずかなり制限されています。また、避難所に車いす対応のトイレがなかったり、適切な介助のできる人がいないために、施設を避難所として地域に開放している所もあります。

街全体としては、「命が途絶えてしまう」というような追い詰められ感はありませんが、生活水準が一気に低下した中で、住民は一分一秒、唇が乾いていることも忘れてしまうような息苦しさ（生き苦しさ）を感じながら暮らしている状況です。

この地域で今、必要なのは、他の被災地と同じです。物資では、ガソリン・灯油・お米・トイレトペーパー・粉ミルクでしょう。でも、物資と同じくらい欲しいのは心への寄り添いです。生きる意欲、誰かに見守られている安心が欲しいのです。「心が萎えてしまった」この言葉は、震災直後に出会った人の言葉です。

「助けて」と言えば、「どうしたの」と声をかけて、共感してくれる人が必要なのです。また、声に出せない「助けて」に気づく観察力を持った声かけのできる人が必要なのです。このような見守り・声かけができる専門職とは、ボランティアでしょうか。いいえ、介護職の皆さんでしかないのです。介護職が技術として習得している共感、意図的な感情表現は、被災者に生き続けることへの安心や意欲を注入してくれるのです。また、身体介護という正しい介助技術を身につけた上、震災により買い物できない人の買い物、洗濯のできない人への洗濯、居室の掃除ができない人への掃除という、生活支援に専門的視点を持って行うことができるプロフェッショナルな職業も介護職の皆さんしかいないのです。

震災当事者となって感じたことは、介護職の役割は明

確であるということです。まず、震災直後は自衛隊が「救助」に入り、その後救助した人には医療職が「救命・救護」を行います。ここまでは生命危機レベルですので、介護職は後方支援という存在と言えるでしょう。しかし、この生命危機レベルを脱した後は、生活危機レベルがあります。生きることの難しさ、生活を継続することへの不安さ、です。この生活危機レベルを和らげる役割は介護職なのです。その人が暮らしている生活空間の傍で、時には見守り、時には声かけを、そして時には介助を、そして時には買い物・洗濯・掃除という生活支援を臨機応変に行える介護職が必要なのです。つまり介護職には「救民（困っている人々を助けること）」という役割が明確にあるのです。その意味で介護職の存在と介護職への期待は大きいのです。ボランティアにはない介護の知識と技術、医療職にはない暮らしの中で駆使することのできる知識と技術を介護職は持っているのです。

震災直後ではありましたが、介護職は生活危機を脱するための技術と知識を持ったわが国に必要不可欠、かつ唯一無二の専門職であることを被災地で確信しました。そしてこの介護という専門性は、医療行為に軸足を置くのではなく、介護行為に軸足を置くことでよりいっそう向上するものであることも確信しています。さらに、平穏な時期には介護職の必要性になかなか気づいてもらえない難しさも理解できました。なんでもないような日々をなんでもないようにさりげなく支え続ける職業、それが介護職なのですから。

「日常」、「安心」という見えないものを「介護行為」という見える形で日々届けている介護職の皆さんに改めて尊敬の念を抱くとともに心から感謝しています。

常勤職員募集

勤務地

→大崎 訪問介護事業所 サービス提供責任者（※サービス提供責任者の経験はなくても良い）

勤務日

→土曜日・日曜日の勤務もローテーションのためあります。

資格：介護福祉士

連絡先：中島 (090-9105-3871)

世界のヘルパーさんと出会う旅 イギリス・オランダ④

2010年7月7日(水)～15日(木)

「タウス（家）ゾルフ（ケア）」と呼ばれる オランダのヘルパーさんとの出会い 「世界のヘルパーさんと出会う旅」事務局 藤原るか

7月10日(土)訪問したオランダ・ライスウィク市(人口6万人・高齢化率15%)では地域新聞が事前に日本からの訪問を1面で報道がありました。また、勝ち進んでいるサッカーの決勝戦当日にあたり、懇談に参加するヘルパーさんを探すのに苦労されたとのことでしたが、素敵な3人の方々とサッカーで沸きあがるデルフトの街で夕食を取りながら懇談。翌日は3人の方々が所属している「フローレンス」という事業所で、オランダの介護保険の説明と施設見学をしたり、昼食をご馳走になったりと充実した内容でした。



フローレンスの玄関で

懇談に参加されたサンドラさん(26歳)は看護師、「看護師の養成を受けている時は、お年寄りのケアは面白みがないと思っていましたが、実際にケアに入って、その

人生の歴史を持った、お一人、お一人に接することができるケアの仕事の面白みが分かり、今では誇りを持っています。「お金よりもその人の歴史に触れることが、自分の自身の成長に繋がっているし、他の人からも尊敬されている」と自己紹介。コーディネーターのマイケルさん(28歳)は以前はヘルパーをやっており、「忙しいときは、現場へもいきますよ」と笑いながら自己紹介。ヘルパーのサマンサさん(36歳)は「私はみんなよりもちょっと年上よ」と紹介。でもヘルパーさんの平均は30代～50代とのこと。

定年は65歳、「定年まで働きたいし、日本に行って働きたい!」と声をそろえておっしゃっていました。オランダは自転車の国だから日本のヘルパーには負けない(笑い)とのことでしたが、自転車専用道があるオランダの人が日本の狭い道を走るとしたら……と瞬間「勝てるかも?」とひそかに思いました。

翌日、職場を案内してくれる彼女達の生き生きしている姿は「ケアの仕事をする楽しさ」を体で表現していました。

時給計算でレベル1でスーパーのレジと同じ位(€9～€10・日本円換算€1が120円→1080円～1200円)。年齢・経験・レベル(資格)によって賃金が上がってゆくシステム。

サマンサはレベル4を目指しているところで、週1回学校に通っているとのこと。費用は無料!賃金も保障!されているといううらやましいお話。本当は当たり前。たぶんそんなことでうらやましがっている日本のへ